
サイコロジー倶楽部

密 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイコロジ－倶楽部

【Nコード】

N0563D

【作者名】

密 麻容

【あらすじ】

『サイコロジ－倶楽部』は特別な心療内科。医者は一人で、他は『部員』。病院ではなく倶楽部。

その倶楽部では、『部員』の特別な能力が人の心を癒していた。医師であり、部長でもある泉里が、運命を導いていく。

【ミッシング・リンク（アナザーストーリー）】を先に読んでいただいた方がわかりやすいと思います。

第1話：仮想幻視（カソウゲンシ）

黒髪が印象的だった。

サラサラと揺れる髪は長くもなく短くもなく、ただ似合っている
としか言いようがない。

前髪は少し長めで右に流れていて、それが自然に見えた。顔の造
りが整っていて、目が逸らせない。

視覚が、奪われる。

「あなたが私を助けてくれるのですか？」

問いかけは浮くこともなく、受け止められた。

「君が望むなら」

自信を持って言っているのではないことがわかった。本当に、
「私が望む」ことをしたいという宣言だ。

だからこそ信じられる、不思議な言葉。

それが私とサイコロジィ倶楽部の部員との出逢いだった。

*

「『^{げんしむけい}幻視夢景』が必要だと思ったの？」

隣に位置する部屋のマジックミラーから、二人の少年は診察の様
子を見ていた。普段は待機室として使われる簡素な空間で、診察室
の声は聞こえるが、待機室の声は決して聞こえない。この部屋の別
名は看視室と呼ばれていた。患者の関係者が希望するときに使用し
ている。

学則に縛られたような模範生徒の格好をした黒髪の少年、冥^{めい}はミ
ラーから視線を隣に立つ人物へと移した。強い意志のこもった瞳が
人を捕らえる。きつちり着こなされた学ランは、冥を優等生に見せ
ていた。

腕を組んだ姿勢で目だけを冥へと向けた泉里^{せんり}は、くせつ毛の淡い

茶色の髪を軽く揺らし、首を傾げた。目は楽しそうに細められている。

「そつだよ？」

肯定するも疑問形に語尾を上げたことに對し、冥は溜息を吐いた。曖昧な言葉は断定にはならない。

決定事項を提示するほど泉里は優しくなかった。この場合、言葉に含まれているのは自己選択と考察だけで、つまりは「自分で考える」、ということだった。

幻視夢景。今診察室にいる五月雨の治療方法を、泉里はその四文字で命名した。視覚を騙し、一時的に心身を回復させる方法で、それは夢のような景色であることから夢景と命名されたと一般には思われているが、泉里の意図はそうではないことを冥は知っていた。幻視は幻だから現実さを伴ってはいなくて、そこにあるのはただの願望だけだ。夢は見るだけで何も生みはしない。

「幻視夢景…五月雨は彼女に何を見せるんだろ」

「彼女は見るべきなんだ。心に閉ざすべきではないものを多く閉ざしすぎて許容量がなくなっているから。それじゃあ望みは叶えられない。さあ、五月雨はどうするかな？」

コンツと軽くマジックミラーを叩いた泉里は、優しい眼差しで鏡の向こうにいる五月雨を見た。

サイコロジ―倶楽部の部長である泉里は、倶楽部の中で唯一医師としての資格を持ち、部員の信頼や親愛を受けていた。部員は泉里の助けがあつたからこそ、今倶楽部にいる。

自分の持つ能力を正しく使い、人を救う方法。それは心療内科という医療機関に最も適していて、泉里は部員に価値を与えた。しかし、それだけではなく、泉里も救われたのは確かだった。部員のほとんどは能力の影響で一人であることが多く、「一人であること」は良い思い出を与えはせず、反対に奪ってばかりいた。だからこそ同じような能力を持つ者は側にいてほしいと互いに思える存在になった。泉里にとって部員は護るべき存在であり、仲間であり、家族

のようなものであり、かけがえのない友人だった。

その泉里の五月雨に向ける視線とは裏腹に、冥は少し不機嫌さを滲ませた視線をミラーの先へと向けた。

「なんで患者の僕に五月雨の治療を見せるの？」

「…もしかして妬いてる？ 君は五月雨の患者だからね。第三者の視点から見る良い機会だと思っ。今回君に対しての治療はコレだよ。ちゃんと彼女の親族から許可は取ってある」

余裕の笑みを浮かべる泉里が示す先には、先程の音が聞こえたかのように五月雨が視線を向けていた。そしてゆっくりと口を動かすのを見て、泉里は笑みを深くした。読唇術に長けている泉里にとつて読み取るのは簡単で、冥は自分で同じように口を動かし、理解しようとした。

唇五回の動きは読み取り易く。

冥は驚きで反応が遅れたが、少し赤みの差す頬を隠すように俯き、勢いよく鏡のカーテンを閉めた。

五月雨が口で作った無音の言葉は『せんり、めい』だった。

「…見えてないくせに」

「気配でわかったのかもね」

泉里がフツと笑ったのに対し、冥は何とも言えないしかめ面を浮かべた。

治療と病称

「まずは自己紹介するね。僕は五月^{さつき}。わかっていと思うけど、ここの医師は初めに会った泉だけ。だから僕は『先生』じゃないから。あと君の名前は聞かないよ。ここには必要ないからね」

優しい表情で、緊張しないよう友達のように接してくれる五月と名乗った部員。医者ではないと言ったが、心の治療ができるからこの場所にいることは間違いない。

サイコロジー倶楽部は普通の心療内科ではない、と噂で知っていた。しかし、内容までは噂されていなかったので、一瞬迷った。

迷ったのはここを選んだことに対してではなく、どこまで自分を話せるか、だ。

人には話せないことが一つはある。しかし、そんなレベルではない秘密を私は持っている。知られることは世界の根源を表す、そんな大きな秘密。しかし知られてしまうとしたら、それはあの人がそれを望んだということだから。

「さて、と。君の症状はさっき聞いたからね。『分別境界不可視症^{ぶんべつけいがいふかしじょう}』ということにしようか」

「『分別境界不可視症』？」

聞き慣れない単語を復唱した。

言葉の感じで意味はわかる。しかし病名としては不自然だった。

単語を並べただけのように感じるが、すんなりと受け入れることができる。耳に馴染んだ感触がするのは勘違いだとはわかるが、それ以上に安心する。

自分にピッタリとしすぎていた。

「本当にそんな病名が？」「しようか」ということは、作ったのですか？」

「スルドイね。そう、僕が作った名称だよ。ここではそれを『病称』と呼んでいる」

座り心地の良さそうな椅子に背を預けず、身を乗り出して語る姿勢は医師とは感じさせず、親しさだけを感じた。医師としての場所にいるにも拘らず、先入観なんてなく。友人と接しているかのような気楽さだった。

いつのまにか緊張は解け、そこにあるのは不思議な交流で、感じるはずのない空気に戸惑い半分、妙に納得できた。

現実には存在しない、澄んだ音が耳を撥った。

「何故、私のために病称を？」

「心の病気に名前が一つであるはずがないから。人それぞれ心は違うから。だから人によって僕たち部員は名前をつける。それがこの倶楽部のやり方だよ。普通の病院ではそんな余裕が無いから変に感じるかもね。おかしいと思う？」

「いいえ。とても…素敵だと思います」

本当にそう思えた。

自分だけにある固有の名称。それは自分の状態を明確に示している。言葉に拘るなんていつもはしないはずなのに、今は拘りたかった。拘りたいのは、希望ではなく渴望で。

ふと、泉里の顔を思い出した。この場を用意したのは彼だ。彼らしいやり方に笑みが漏れる。

「よろしく願います」

この人なら教えてくれると思った。忘れた意味、大切なもの。認識の甘さが招いた自己嫌悪。

もう何一つとして見失いたくないと思っている自分が確かにここにいた。

*

「『分別境界不可視症』…さすが五月雨」

「センスいいよな。冥には『増殖型不確定要素症候群』だっけ？
よく思いつくよな」

泉里と入れ替わるように部屋に現れた雫は、ははっと笑って壁に背を預けた。冥はこの看視が自分への治療というのは強ち嘘ではないのかも知れない、と思った。しかし、全部が本当だとは思えない。天然の稲穂色の髪がサリと流れ、嫌味なほどに整った顔に笑みを浮かべた雫は冥の表情を窺った。

雫の治療方法は視覚を使う点で似ていたが、決定的に質が違っていた。泉里が冥には雫ではなく五月雨を選んだのは、今回は雫の治療方法ではなく、五月雨の質が合いましたからだった。

冥は無表情に雫を見、溜息を吐いた。

「静ちゃん、暇なわけじゃないよね。早く部屋に戻ったら？」

静、という単語を強調して言った冥に対し、雫はあからさまに嫌悪の表情を浮かべた。静は雫の倶楽部での名前、つまり『記号』でしかないのは冥がよく知っていることで、決して固有名詞にはなりえない名前だった。冥は『本当の名前』を知っているから、『記号』を使うのは嫌がらせになる。

「…うるさい。『静』は冥が使う名前じゃないだろ。五月雨を『五月』と言わないように、泉里を『泉』と言わないように。冥、泉里が何を言ったか知らないけど、この患者は気を付けた方がいい。君が今回ここにいる意味、わかってるなら余計にな」

「…うん、アリガト。泉里は直接には言わなかったけど、僕がここにいる意味はわかってる。ただ、先が読めない分、不安定すぎて嫌なだけ。ごめん、八つ当たりして」

雫は冥の無表情の中に、はっきりと謝罪をこめた表情を見つけた。それは親しい者にしかわからない、冥の感情で。

親しい者だけにわかる、冥の優しさだった。

短期間で病気を完治させる倶楽部は、患者とは深く関わらないことが原則だった。多くても三回の治療で治す。そうでなければ能力は治療になりえない。能力は特別だからこそ、影響は少ない方が良

い。しかし冥は能力に影響するが、悪影響はなく、もう三ヶ月も倶楽部に通っていた。冥が本当に必要としているのは治療ではなく、交流だからだった。だから今、部員たちは冥を患者としてだけでなく、友人として接している。

コンピュータを駆使する冥は、周囲には冷徹なように見える。しかし冥は機械に依存してなくて、いつも見ているのは機械ではなく人間だった。それは部員だけが知っている。冥も他の人に知ってもらおうとは思っていないこともあり、誤解は解けないまま放置されていた。

冥の病気。雫が付けた病称は『不明瞭限界症』で、『不確定』が一番の鍵になっている。不確定要素は冥を不安定にさせ、心を蝕んでいく。

「不安定は冥の不安要素だからな。八つ当たりくらいで怒らない。今回、辛い思いをするのはあの患者ではなく、冥かもしれない」

雫はそつと冥の肩に触れた。

冥は少し高い位置にある雫の瞳を見、逸らそうとはしなかった。存在する感情は同情でも憐れみでもなく。

ただ何かを護りたいという気持ちだけだった。

「わかってる。今、雫がここにいる意味も」

少しだけ口元を緩めた冥に、雫は優しく微笑んだ。

触れた指先から伝わるのは体温だけではなく。患者と医者という立場は関係なく、友人になったのは自然の成り行きだった。泉里と同様に、救われていたのは冥だけではなく、部員も影響していた。拒絶しない存在。それは希少で、時にとても必要とするものだった。

雫はそつと手と下ろし、マジックミラーへと視線を向けた。

「五月雨、今回選ばれたのには意味はないんだ。そう、これは決まっていた」

不可視と同調

「まず一年前の記憶を全て開けようか。いる、いないは関係なく全て。玩具箱を広げるように」

顔の前で軽く手を叩かれた。

一瞬で目の前に青い景色が広がった。

それは遠い昔に見たような気がするのには気のせいでもなんでもなく。事実でしかないもので。

一年前からもう始まっていた不可視。景色の中にはいるはずの人がいないのが証明している。あの時辛かったのは自分ではなく。同調できなかったことに意味を見出せず、自分の無力さを知ったのに。決して閉ざしてはいけなかったのに。

「それは…誰？」

近くで聞こえる声。それは記憶を呼び起こし、深く沈んでいけた。忘れていたワケではない。泉里を思い出せたのだから。ただ近くにすぎたから、同一視してしまっていた。

彼女は別の個体なのに、同じと看做したための不可視。

原因がわかれば殻はすぐに破れるはずだった。中にあるのは真実の言葉で。

「それは…私にとっての絶対的存在」

*

「絶対的存在…？」

雫が去って一人きりになった部屋の中で、冥は呟いた。引っ掛かったのはその単語に一つの鎖を感じたからだだった。戒めを嫌う冥は、言葉に表れる抑揚を敏感に感じる。だから、不安定なモノは不安要

素になりえた。しかし、感じた鎖に不快感はなく、純粋な繋がりのような感じを受けた。

冥は顎に手を当て、注意深く二人の様子を見た。共通している事象が多すぎた二人の感応は、異常に思えた。それは冥にだけわかる微妙な異常だった。

突然、少女は糸の切れた人形のように倒れ込み、椅子から落ちそうになった。それを支えようとした五月雨は同時に頭を抱え込み、少女を体で受け止めた。冥は思わず鏡に手を当てた。無機質な鏡から伝わるのは冷たい感触だけだった。

五月雨の反応が良かったこともあり、二人に怪我はなかった。冥は安心するも、何も出来なかったことに対し、唇を噛んだ。

一枚の鏡で隔たれた空間は思ったよりも離れていて、見ていることしかできない。鏡に当てた指に力が入った。

「ここにいる意味なんて…！」

「あるわよ」

冥は動揺した。すぐに声がした方向へと視線を向けた。

隣には鏡の向こう側にいる少女と同じ顔の少女がいた。音もなく入ってきて、気配まで消している。思ったよりも近い距離だった。

少女の顔に浮かぶのは悲しそうな笑顔で。

少女は冥へと視線を移し、冥の手に触れ、いつの間にか力を入れ過ぎていて白くなっていた指をそっと包んだ。

「あの人は同調しちゃったのね。でも、それが良かった」

凜と響く声に含まれているのは喜びだけで、二人を心配している様子はなかった。それが冥を安心させ、硬くなっていた表情を緩めさせた。

同じ顔を持つ双子の少女が片割れを信じるなら、それは絶対だ。冥が鏡へと視線を戻したとき、五月雨は一筋の涙を流していた。

「早く戻ってきて…樹里^{じゅり}」

音と視覚

「お帰り、樹里」

隣の部屋から現れた樹音^{つゆ}に対し、樹里は満面の笑みを浮かべた。そんな樹里の表情は珍しく、樹音も笑顔を返した。

同じ顔でもはつきりとわかる違いがある。

同じに見えても別の個体である限り、同一視なんてできない。

樹音の差し出した手をしっかりと取り、樹里は立ち上がった。

「冥…」

座り込んだままの五月雨は、まだ少し痛む頭を右手で押さえながらも冥の存在を捕らえた。

視覚だけではなく、冥の存在を音で感じた。

それは双子の少女が影響していることが、今だから理解できた。看視室から聞こえない窓を叩く音が聞こえたのも、彼女の影響だった。五月雨は、先ほど同調して見た光景で、音を操る、二人で一對の翼のような存在がいることを知った。まだ、影響は残っている。

冥の音が揺れていた。

「なんで悲しそうな顔を？」

「…何もできなかったから。隣の部屋にいたのに見ているだけしかできなかった。ここに意味なんて」

「あるって言ったわよね？」

続く言葉を遮り、樹音は冥の方へと向かった。樹音の後ろでは樹里が静かに微笑んでいる。

樹音は部屋に入ってこようとしないうちに冥の腕を引いた。

前に重心が移動した冥は自然と部屋へと一歩踏み出した。一度入ってしまったら、足は自然に動く。

「樹里と同調してしまったとき、彼はあなたの名前を呟いたわ。それがこの世界と自分を繋ぐ一本の糸のように。あなたがいなかったら多分、樹里も傷ついていたはずだから…いてくれてありがとう」

「視覚なんて簡単に騙せる。だからこそ、視覚に頼らず本物を探すことに意義があるんだよ。偽物に意味はあっても価値はない。同調した時、頼れたのは視覚ではなかったから…ありがとう」

冥は樹音と五月雨、両方から感謝され、言葉を失った。

ただ、いるだけでいい。そんな価値が自分にあるとは思えなかった。

しかし、二人が救われたのは事実だった。五月雨の閉ざされた世界の中で感じる事が出来たのは冥の気配だけで、その名前こそが自我を保つ唯一の糸だった。遠くに感じる泉里の気配なんかでは敵わない。音の影響が支配する。

そして、樹里も近くにいる樹音を感じ、同調している五月雨の負担が軽減したからこそ傷付かなかった。冥がいたから救われたのは明らかだった。

「そんな…僕はみんなみたいに強くないのに」

「僕は強くなってる。ただ、わかるだけ。自分の弱さを自覚しているから、支えを知っているから寄りかからずに立っていられるだけ。それだけに過ぎないんだよ」

五月雨は右手を冥へと差し出した。五月雨にとっての支えは泉里なのか、それとも他の誰かなのか。

冥は迷いを振り切り、五月雨の手を力強く取った。それと同時に五月雨は腕を引き、自然と冥は五月雨に抱き込まれる体勢となった。ちょうど先程まで樹里がいた場所だった。

冥はしばらく何が起きたか理解できなかったが、伝わる温度が気付かせた。決して不愉快ではない接触だった。しかし抵抗する気はあり、冥は腕から抜け出そうとしたが、思いのほか力は強く、少しも姿勢は変わらなかった。上から樹音が冥の肩を押したこともあり、冥は抵抗を諦めた。

「あなたは不安を抱え込みすぎているのね。だけど心は濁っていないから。だから不可視になることなんてないし、音は澄み続ける」
樹里の言葉は理解するより早く頭に入って、冥は軽い睡魔に襲わ

れた。張り詰めていた気が緩む。音は脳に響き、酔わせた。

そして包まれている体温は自分の体温に似ていた。こんなにも近すぎる存在が厭わしくないことに、冥は違和感と共に充実感を味わった。機械では埋まらない隙間は、人にしか埋めることは出来ない。「視覚なんて簡単に騙せるハズだ……」

心の司

「お世話になりました」

「どういたしました。また機会があったら来てね」

樹里と泉里は笑みを交わした。冥と五月雨を残し、樹里と樹音はそつと部屋を抜け出して、隣の部屋で待機していた泉里と薬剤師の歩あゆむと共にリビングへ移動した。

泉里と樹里の様子を隣で見ていた樹音は、歩にそつと耳打ちした。

「泉里と樹里つて仲良かった？」

「気は合うみたいですよ。良かったですね、戻ってこられて」

歩の言葉に樹音はうん、と嬉しそうに笑った。

樹里は『プログラムの影響』を受けるのが遅かった分、強く障害が出てしまった。樹音に先に障害が出たため、『プログラムの影響』を受けることの予想は出来ていたが、潜伏期間が思ったよりも長かった。

「大切なものに気付かないと『同一視』と同じだから。でも『特別視』は限定に似て非なるものだしね。そう、限定するなら『有在視』。存在認識が一番の特別だから」

泉里の呟きに、二人は頷いた。泉里が言った『有在視』という単語は実際にはないが、音を司る二人には理解できる。『存在する、有る』ということを認識して視ること』が大切だった。

*

「五月雨は気付いたね。それはあの人が望んだことだから仕方ないけど……そろそろ僕もばれるかな」

泉里の言葉は隣の部屋に向けられた。

五月雨に支えられて眠る冥。五月雨にも自然と優しい表情が浮かんでいて、まるで親子のように見えた。それは強ち間違っていないだろう。

マジックミラーの壁は泉里にとって意味を成さず、五月雨の状態を心で感じていた。泉里の能力、『心理現視^{しんりげんし}』はその人を見るだけで、その人の心がわかる。悪影響を受けることが多々あるが、倶楽部にいる間は感じなかった。倶楽部に存在するのは部員の本質のみだけだった。

樹音と樹里が帰り、二人きりとなった部屋で歩は笑みを深め、薬剤師としての服から『時の司の長』としての簡素な黒いワンピースに着替えた。

時の属性は黒。永遠とも思える時間は自由でもあるが、戒めの単位だった。限りがあるから、人はその中で希望を持つ。不老不死に存在意義がないからこそ、神は転生する。生まれ変わってリセットする。それなのに、歩は死ぬことはなく、転生もなかった。時の司の長となったときから、生き続けている。

そんな歩の能力発動は笑みだった。笑うことにより、心が安定する。顔の筋肉を利用することで指を鳴らすのと同様の効果があり、それ故に、歩は笑みを絶やさない。能力発動の仕種は癖になる。

泉里は他の長に洩れず、能力発動に指を鳴らした。

「歩、君が何を思っているか僕にはわからないけど。『ソレ』を望んでもいいんじゃないかな」

「今は、自分がどう思っているのかさえわかりません。ただ…私は醜くなりたくないから。だから今のままでいいんです、『心の司の長』」

黒一色の服装に着替えた泉里に向けた歩の言葉は吸収された。無くなったのではなく、取り込まれた。決して部員には聞かせられない会話だった。『世界の関係者』の存在を今、知られるわけにはいかなかった。

心の属性は黒。永遠に広がる可能性は宇宙を示す黒。心に悪が占

める割合は高い。しかし、そこから始めるから白は際立つ。優しさが嬉しいのは、そこに白が存在するからだ。

「あの『音の司の長』の姉妹が来たのはあの人の望んだことだけだ。君に何か伝えたかったのかな」

「…どうでしょう。あの人は直接教えてはくれませんから。でも、これで良かったんです」

「良かった、ね」

泉里の囁く声はどうしようもなく甘く、歩は自然に笑みを優しいものへ変えた。

あの人の望み。それは救いであり、擁護だ。この出会いは意味があるはずだった。

「ところで、冥をあの場所に置いた本当の理由は何だったのですか？」

「本当の理由：簡単なことなんだけどね。冥も雫も間違っではないんだけど、もっと簡単に考えればいいんだよ。看視が目的ではなく、五月雨には冥が必要だった、ということなんだけど」

二人の様子を見て、歩は頷いた。同調しても不愉快ではなく、不愉快なんて感じないほどに近すぎている五月雨と冥は、メンタルシンクロ率が高すぎだった。だからこそその存在。三ヶ月も側にいることが出来るのは支えが冥であることを示していた。そして冥に惹かれる理由はただ一つ。それ以外、の選択肢がなかったただけだ。

「誰が一番早く自分が『心の司』だって気付くんだろうね」

サイコロジ―倶楽部はただの倶楽部ではない。

隠れた出逢い

どこにでもある学ランが、まるで聖職者の服に見えた。

「大丈夫ですか？」

運悪く不良にからまれていたところで冥は助けられた。三人相手に軽々と攻撃をかわし、少年は一撃で倒していった。人体の急所を突いている。振り返った少年の学ランには近所の中学の校章がついていた。

冥が呆然として言葉を返せないでいると、少年は心配して駆け寄ってきた。

「どこか怪我でも？」

「いや、全然。ありがとう」

少年は安心して笑みを浮かべた。

冥は不思議に感じた。年下に助けられても感謝以外の気持ちはなく、心配されて近くなった距離に嫌悪感もない。

それはまるで、あの部員達のように。

「どうして助けてくれたの？」

冥は少年の目を見た。動じることなく、揺らぐことなく笑みへと細められる瞳。本当の優しさとはこれかもしれない。

冥は張り詰めていた気が緩んだのを感じた。

「自分ができることだからです。それに、人を裏切りたくないですから」

少年はそれだけを言うと言と背を向けて歩き出した。まだ聞きたいことがあるが、どれも引き止める理由にはならなかった。

冥は考えずに声を出した。

「君の名前は？」

思わず出た質問だったが、一番ふさわしかった。少年は足を止め、ゆっくりと振り返った。少しはにかんだ表情が印象的だった。

「須賀由宇です」

隠れた出逢い（後書き）

冥と由宇はこんな風に出会っていました。

第2話：言語誘導（前書き）

「十夜」は、世界の関係者の十夜ではありません。
同じ名前の理由はまた別の話で。

第2話：言語誘導

もう、何も望みはしないように。

満月の夜に空気が澄んでいた。少し熱気を含んできたように感じる。季節は夏に近い。街の喧騒、人の雑念はここに散らばっていて、無秩序だった。

それは何も干渉されない世界のように。孤独を表面化させたような幻覚を感じた。

一人で外に出るのが好きだった。仲間と歩くのはもちろん好きだが、仲間以外の大多数とでは一人でいるのを好んでいた。限定を加えるなら夜、深夜ならなお良かった。

そんなの、この力を考えると自然なことだけど。

人気のない公園の側道を通り過ぎるとき、微かに言い争う声が耳を掠めた。

「お前、何言ってるのかわかってんのか？ 痛い目みてえのかよ！」
こんな場所での騒ぎなんて、大体予想がつく。声のする方へ向かうと、一人対五人の構図が出来ていた。一人なのに、余裕で向かい合っているのが目を引いた。その人の後ろに怯えたように座り込んだ少年がいる。

余裕そうに立つ青年に声を荒げた男が、すぐに暴力に出ようとするのが典型的すぎて、思わず笑みが洩れた。こんな公園で犯罪を犯すくらいなのだから、とは思っていたが、ここまで予想通りだと呆れを通り越して可笑しくなってしまった。滑稽で、とてつもなく愚かだ。

そして、道化に見える。

「コイツを助けるつもりか？ コイツにそんな価値があると思ってんのかよ！ コイツは俺に金を渡すためだけに存在してんだよ。だ

から俺はコイツから金を受け取る。それでいいじゃねえか」

「…ホント、救いようがないね。全然論理的じゃない。あと、僕にはこの人の価値なんてわからない。でも、あなたよりは低いとは思わない。単細胞な行為は止めといた方がいいよ、馬鹿に見えるから」

間髪入れずに向かってきた拳に、青年はカウンターで対処した。流れるような動きで拳を避け、背後に回って首に手刀を入れて地面に落とした。

月光に淡い茶色の髪が映える。

「ちゃんと見ててね」

僕の存在にいつから気付いていたのか、一瞬視線を寄越して、次の動作に入った。

二人同時に向かってくるのに対し、一人の拳を受け止め、そのまま腕を引いて体勢を崩させ、その反動でもう一人に回し蹴りを加えた。足が綺麗に脇腹に入っている。

呻き声が聞こえる。負けた者はどこまでも落ちて、堕ちていく。

青年は軽い動作で腕を払い、残った二人を一瞥した。動く度に裾がはためく。後ろからわかるのは中国系の服だということだけだった。

「次は手加減しないから。こんな馬鹿なこと、早くやめなよ」

二人は倒れている三人を残して逃げていった。男たちがこちらに向かってくるかもしれないと、一応構えていた姿勢を解除した。

簡単に仲間だと言うくせに、肝心なときには裏切る。自分が大切で、他の人なんてどうなっても良いと思っている、薄っぺらい人間関係だった。

被害者はいつの間にかいなくなっていて、青年がそう仕向けたのだと気付いた。自分に注意を向けさせて、逃げる隙を作っていた。人を助けるのに慣れているのかもしれない。

青年はくりりと振り返った。顔は、見ただけでは性別がわからなかった。

肩に届きそうな長さの髪。男女のどちらにも見える顔。どちらか

という女性のようにも見えたが、感じるのは男性の雰囲気だった。容姿は綺麗で、いつも周りにいる美形と比べても劣らないくらいだ。

本当にこの人は。

「これからどうする？ 警察を呼ばれても困るし。面倒が嫌ならこの場を離れた方が良くと思うけど」

「…え？ あ、そうですね」

「途中まで一緒に行こうか」

「…はい」

思わず頷いていた。あれだけ人と関わるのを避けていたのに、無意識の返事は肯定だった。本能が、何かを感じ取っている。

あと一回。あと一回で青年の心理がわかる。

『能力』を発動するには『会話の三往復』が必要だった。この能力で辛い目に遭ってきたのに、今は好奇心が勝っている。

こんな風に心を知るのは反則だってわかってはいるけど、止められなかった。それほどまでに、惹かれていた。どうしようもなく、心が変化していく。

今だけは、許されてもいいはずだ。

公園を抜け、先を歩く青年に声をかけた。

「あの…名前は？ 僕はみず…雨水うすいです」

「僕はキサラって呼ばれてる。本名は如月十夜きづひな じゅうやっていうんだけど…君ならいいや。十夜でいいよ。あと、敬語はいらない。同い年くらいじゃない？」

微笑を浮かべた十夜に、返事ができなかった。

言葉と共にやっとわかった心理。眩暈がしそうだった。

心までがこんなにも安定していて強い人なんて、今まで一度しか会ったことがなかった。一番信頼している、僕を救ってくれた泉里。十夜は泉里と同等、しかし性質が違う心の強さを持っている。自分の本当の名前を言ったことは間違いないやなかったと思えた。この人の前ではなるべく嘘は言いたくなかった。

この存在は確実に自分の中で大きくなり始めていた。

十夜は公設のグラウンドに入り、ベンチへ向かった。

「なんで僕に声を掛けたの？ 見て見ぬふりするかもしれないのに」
「逃げない人だと思ったから。最悪、アイツらが君に向かったとしても、君なら対処できそうだと思うたし。対処できるように構えてたよね」

あの場でそこまでわかるのは仲間か、それとも観察力に優れているのか。前者ではありえないことはわかっている。それは初めからわかっていた。仲間は間違えない。後者だとしても、交戦している状態でそれを考える余裕があるのが凄い。

「ありがとう」

「そう、良かった。ただの自己満足にならなくて」

予想できない言葉に耳を疑った。相手の心理を知れている今、予想できないことはないはずで。しかし思ってもいなかった言葉が現実に出ている。心理と行動は繋がっているはずだ。

『言語誘導』。僕のこの能力は、会話三往復で相手の心理がわかる。既にそれは発動している。そして、今まで間違いなんてなかった。ということは、これは間違いではない。

それなら、考えられることは一つ。何万人かに一人はいる、自分の能力が通じない相手。心の状態や雰囲気は感じられるが、考えていることはわからなかった。

十夜は泉里と同様、不確定要素だった。

「自己満足、ね。それは僕が助けようと思ったことも入るかな」

「それは優しさだ。見返りを求めない助けは」

十夜は薄く笑い、ベンチの横にある自動販売機に向かった。ネオンの光が十夜を輝かせる。人工的な光なのに、十夜を一層際立たせていた。何度か雰囲気は泉里と重なるが、同じではない。

『不確定要素』だからかもしれない。十夜の内面に興味があった。十夜はレモンティーの缶を差し出した。

「これでいい？」

「…ありがとう」

その缶に、温かさと冷たさを感じた。温かさは十夜の優しさから、冷たさは十夜の心を読んでいるという罪悪感から。治療以外ではなるべく使わないようにしていた能力を、ただの好奇心で発動させている。

それは全てを裏切っているようで。

ベンチの背に軽く腰をかけた姿勢でコーヒーを飲んでいた十夜の前に立った。

今でも計算が働いていた。ここで十夜に嫌われても、僕には泉里と仲間がいる。失うモノは小さい。

「…ごめん。今更言うのは卑怯だけど、僕は相手の心がわかるんだ。気持ち悪いよね？ 嫌だよね？ だから」

「…心がわかる？ 何考えているかわかるってこと？」

「あなたに対しては詳しくはわからないけど、今は少し動揺しているって大まかな感じでわかる」

「ああ、そういうこと。なんか変だと思ってた。気配を感じるんだ。君が近くに、すごく近くににいる感じがしてた。そうか、読心みたいなものか」

遮られた言葉に続くのは妙に納得したような十夜の声で、思わず十夜の顔を凝視してしまった。十夜は首を傾げて不思議そうに見返す。

この瞳に囚われるのはとても心地が良かった。この瞳だから惑う。この手の瞳には昔から弱かった。

だから、もう。

「なんで…嫌だと思わないの？ 心を覗かれてるんだよ？」

「詳しくはわからないんだよね。それって鋭い人と同じじゃない？」

「…もう一度よく考えて。それでも僕の側にいれると思ったら。友達になれると思うならココに来て。ココが僕の居場所だから。…タイムリミットは明日の七時」

小さな紙切れを渡した。そこに書かれているのは倶楽部の名前だ

けで、裏に即席の地図を書いた。簡潔で、充分にわかる。

十夜が来るかどうかは賭けだった。賭けに負けても何も失わないはずだった。ただ、心に隙間ができるだけ。

わかっていたんだ、このときから。

第2話：言語誘導（後書き）

十夜が声をかけたときにはカウントされません。「会話」ではないためです。

基準の一つ

「何かいいことでもあった？ 十夜」

親友、悠里^{ゆり}夏目^{なつめ}の声に十夜は顔を上げた。向かい合わせに座っているため、自然と目が合う。

十夜の机に広げられた課題の大半は終わっていた。解答欄は隙間なく埋められている。夏目は既に終わっていて、十夜の様子をじっと見ていた。不躰ではなく、優しい眼差しが十夜に向けられる。対等な立場にいるからこそその視線だった。

十夜は、休憩時間はいつも夏目と共に勉強していた。学校という場所は有効に使うのが二人のモットーで、課題は全て放課後までに済ませている。それは最も効率のいい休み時間の利用法で、教科書はいつも学校にしかなく、家に持ち帰るのは『自由な時間』だけにしていた。

「…夏目は、自分の心が他の人に聞こえるとしたらどうする？ どう思う？」

「何、突然。うーん全てわかるのは嫌かも。筒抜けっていうのがね。フェアじゃない感じするし。でも好きな人ならいいかもね。嫌な部分が聞こえるのは勘弁してほしいけど、それ以上に好きという気持ちを伝えられると思うから」

夏目の言葉に十夜は考えこんだ。無言の時が過ぎる。十夜のいつになく真剣な表情に、夏目の口元は緩んだ。

夏目は机に広がるプリントの残り数個の解答欄を、逆の方向にも関わらず綺麗に埋めていった。それは甘やかしではなく、優しさだった。

価値のあるのは数学の問題ではなく自分が提起した問題で、答えは自分にしか求められない。今はそれを解くのが最重要課題だった。「キサラ先輩に好きな人がきたんですか!？」

「良かったわねーホント。あんたに好かれた人ってどんなの？」

突然現れた二人に、夏目は間髪入れず教科書を丸めて叩いた。柔らかな音が二人の声に重なる。音以上に衝撃があるようにしたのは、手加減をしなかったからだだった。

「悠里先輩、ひどいですよう」

ふわふわの明るい茶色の髪を押さえながら、樋口由希ひぐち ゆきは上目使いに夏目の顔を睨んだ。子犬のような小動物の雰囲気を漂わせている。しかし、大きな瞳から窺えるのは強い意志だった。にも関わらず、周りではクラスメート達が可愛いなどとはやしていた。由希の動作は、本質をわかっていない人には可愛く見えるのは当然だった。

もちろん、夏目は由希の本質を理解していた。

夏目は由希のそんな仕種に、にっこりと笑顔を返した。笑顔に含まれた意味は「静かにしようね」。由希は憮然とした表情を浮かべたものの、大人しく口を噤んだ。

由希は夏目に勝てなかった。上級生だからという理由だけではない、確かな差がある。

「何するの！ ホーント悠里ってキサラ鼻屑。そんなんだから誤解されるのよ」

軽くウェーブがかかった黒髪をかき上げ、千条留美せんじょうるみは夏目を軽く睨んだ。

友人としての気軽さがそこには現れていた。留美の、美人と称される容姿は確かに整っていて、人の目を惹き付ける。女性らしさを十分に表現した挙動は優雅ともいえ、日々の努力はそこには見えなかった。いつも自然とお嬢様を演じている。それが、他人に求められている自分の像だと理解しているからだだった。

しかし、気の許せる人物の前では維持する必要はなく、夏目や十夜の前では素の、気の強い留美になっていた。

「…好き、なのかな」

そんな中、ぽつりと呟いた十夜に夏目は微笑し、留美は意外そうに十夜を見た。そして由希は身の乗り出し、十夜の前に手を置いた。バンっという音と共に振動が伝わる。

「誰ですか！ 好きな人って」

「由希、黙ってて。十夜、君が出した答えだから何も言わない。でもその基準、教えてくれるかな」

夏目の答えを促すような質問に、十夜は少し迷った後、はっきりと言った。

「…名前と呼ばれてもいいと思ったから」

たったそれだけが、十夜の中での重大要素だった。

*

「あと十分…」

時計の針を気にするなんて何年振りだろう。

遠い昔の癖だった。秒針が動く度に心臓が締め付けられる。鼓動は単調に、しかしながら確実に時と共に刻まれていった。

「約束の時間？ 期待するなんて、そこまで入れ込んでるの？」

五月雨は夕食の準備をしながらクスリを笑い、前を通り過ぎていった。皿の擦れる音が微かに聞こえた。

刻々と進み、近づいていくタイムリミット。夕食の良い香りも、今は何も感じなかった。

タイムリミット

「…夏目」

ポツリと呟いた十夜の声は、行き場を失わなかった。

開かれる扉。差し込む月光。十夜は思わず溜息を吐いた。薬の影響はもうほとんど残ってはいない。ただ、手首に食い込む紐が擦れて痛かった。

夏目は素早く十夜の前に膝を着いた。

「遅くなってごめん。…まさかここまでするとは」

十夜の縛られた手首に絡まる紐を解きながら、夏目は呆れたように小さく舌打ちした。

声に滲むのは悲嘆の感情だった。それは十夜以外にも向けられている。ここまでの思いに気付かなかったのはこちらのミスで。危険信号を発していたのはいつからなのか、十夜には今ではわかっていた。

「間に合わなくても、行くよね」

十夜は自由になった手を軽く振り、痛覚を振り切った。鈍い痛みは気にはならなかった。それだけ気持ちは先回りしている。

夏目の問いかけに、十夜は微笑を返した。それは感謝の気持ちがこもっている、純粋な笑顔だった。

「もちろん」

＊

時計の針はもう八時を差していた。自然と溜息が出る。

一時間前から諦めていた。希望なんてない。しかし胸に燻ぶっている光は消えそうもなく、どうしようもなく。食後の紅茶が喉を通過していく感触が気持ちを安定させた。

何気なく見た窓の外に広がる闇が、昨日の出来事を嫌でも思い出

させて。

鳴らされたチャイムは聴覚に引つ掛からなかった。

*

「雨水…！」

玄関から微かに聞こえた声に、雨水は駆け出していた。いつまでも耳から離れなかった声。近くに感じる気配。もう五感は確実に十夜を捉えていた。間違うはずがない。五感が十夜を捕らえていた。「なんで…」

今頃、という言葉は、雨水の口からは出なかった。現れた十夜の格好は異常ともいえるもので、玄関に出た五月雨は呆然と立ち尽くしていた。上の二つのボタンが外れた、薄汚れたシャツ。走つてきたからなのか、額に汗が浮かび、十夜は髪をかき上げていた。

その中で生々しく映るのは、手首にはつきりと残る縛られた痕だった。雨水には内出血が痛々しく見えた。一番酷く見える箇所から目が離せない。

「早く手当てを」

「それより！」

五月雨の差し出した手を見ずに、十夜は苦しそうに言葉を紡いだ。五月雨は安心させるように、そっと肩を抱いた。五月雨の手から伝わるのはただの優しさだけで、十夜は張り詰めていた気を緩ませた。ここで気を張って警戒しても意味はない。ここに危険など存在してはいない。五月雨の仕種はそう伝えた。

十夜はそれを感じ取り、息を吸って呼吸を整え、いつもと変わらない澄んだ声を発した。

「僕を信じることはできる…？」

十夜の言葉に雨水はビクツと体を震わせ、目を伏せた。雨水は自分の中に残る灯火は決して消えないことはわかりきっていたが、決心などつけることはできなかった。

遅れた時間の空白は嫌でも昔を思い出させて。この状態で何も答えは導き出せなかった。

雨水は静かに足をリビングへと進めた。

「とにかく手当てを」

五月雨は十夜の肩を抱いたまま、雨水の後に続いた。前を歩く雨水の背中に刺さるのは、十夜の強い視線で。十夜の乱れた学生服の理由など、雨水と五月雨にはすでにわかっていた。

だからこそ、二人は何も言わなかった。

「まずその手首から…」

「どうしたら信じてもらえる？」

五月雨の腕からそっと抜け出し、十夜はじっと雨水を見た。合わない視線は二人の状態を表していて、五月雨は思わず深く息を吐いた。

そこにいるのは以前までの冥と自分のように見えて、自分には何もできないことがわかっていた。

「何ができる？」

雨水らしくない、冷たい言葉だった。五月雨は十夜から離れ、雨水の腕を取り、抱きしめた。

精神が不安定な雨水は人形のように自分を取り繕っていて、五月雨はとてもこれ以上見ていられなかった。自然と重なる過去の出逢った頃の雨水。こんな雨水を十夜には見せたくなかった。

雨水の言葉に十夜はゆっくりと目を閉じた。そしておもむろに側にあつた果物ナイフを手にして、刃を自分に向けていた。

軽く引いた刃から零れる、髪の毛。ザツと音がするたびに十夜の髪は切られていった。

「十夜！」

「…血を流すのは君を傷つけるだけだとわかっているから、だから今はこれくらいしかできない」

床に散らばる髪は止まることなく増え続け、比例して短くなっていく十夜の髪。それは神聖な儀式のようにも思えて、雨水は五月雨

の肩越しに十夜を見、無意識に涙を流していた。

溢れるのは思いと、それと。

「わかったから！ わかってるから……」

雨水の脳に流れ込んでくるのは十夜の真摯な感情で、伝わるのは五月雨の体温と鼓動で。

雨水は気が抜け、五月雨の腕にしがみ付いた。自分では立っていない。

「はい、ストップ」

十夜の動きを止めたのは、雨水の言葉と泉里の手だった。十夜の腕はしっかりと泉里に受け止められていた。

簡単に振り解ける力加減の拘束で、しかし十夜は振り解こうとはしなかった。それは諦めではなく、当然の結果だった。これ以上の行動に意味はない。

泉里は空いている手で十夜の髪を梳き、微笑んだ。その表情が示すのは安心だけで、十夜も微笑を返した。

「君もよくここまでやれたね。その強さが救いになったかな……ありがとう。さ、ここからは僕の出番だね」

泉里はにこにこ笑ったまま、十夜の腕を引いた。導いていく先には治療室があった。主に外科専門としての薬品や器具が置いてある。開けられた扉から消毒薬の臭いが漂った。

五月雨は、泉里と十夜が部屋に入ったのを確かめ、ほっと息を吐いた。腕の中にはまだ縋り付いたままの雨水がいる。そつと背中を擦ると、規則正しい呼吸が聞こえた。

もう、雨水は戻っていた。いつもの雨水。倶楽部に来て、部員になつてからの雨水だった。

五月雨は、過去の雨水は雨水ではないと思ったかった。自分の能力を嫌悪し、棘のある言葉で周りを傷付け、自身も傷付いていた。しかし、雨水の能力は部員の中でも唯一のもので、皆が救われている。

支えられているのは互いに同じで。

「雨水？」

「五月雨…僕って冥なのかな」

「いや、僕だと思うよ？」

そうだね、と微かに笑った雨水はいつもの雨水で、五月雨は勢いよく雨水の体を押した。しっかりと立つ雨水。もう完全に体は回復していた。それを見抜けないはずはない、仲間だった。

冥は傷付きたくないから人と関わりたくはないと思っているが、一旦相手に心を許すと絶対的に信用する。一方、五月雨は当たり障り無く接するが、特別な人は限られている。そして、いつも裏切りを恐れている。

始まりが怖い、終わりが怖い。

「…ほら、こんなトコロとか」

五月雨は涙で濡れた肩を一瞥し、雨水に笑いかけた。

弱くはない。強くもないけど、立ち直りは早かった。順応するのが得意なのは、能力を持つ者の性だった。

人を理解しすぎると、自分を見失いかねない。割り切りはしっかり出来ていた。

推定未来

「さあ、説明してもらおうか。僕には君に何が起こったのかわかっているけど、君の口から聞かないと意味がない。わかるよね？」

泉里のその言葉に十夜は頷いた。

治療室から出てきた泉里と十夜はリビングのソファーに向かい合
わせに座り、五月雨は泉里の、雨水は十夜の隣へと座った。

十夜の髪は泉里によって切り揃えられ、今は男にしか見えなかつた。制服は軽く埃が残るものの、しっかりと着こなされていた。

そして、十夜の手首に巻き付けられた包帯は十夜の白い肌に映え、雨水の下に隠された内出血を思い出させた。その雨水の視線に気付いた泉里は、ティーカップに紅茶を注いだ。ダージリンの香りが辺りに漂う。

皆の意識は十夜の声にだけ向けられていた。

「結論は出ていたんだ。もう昨日から迷いはなかった。でもはつきりと気付いたのは今日、友達と話していた時に。そこに由希っていう後輩もいて、聞かれてたんだ。結論を。由希は僕が一度助けたことがあつて、それからずっと休み時間になると教室に来ていたんだ。慕ってくれてたのかな。今日も来ていて…僕が雨水のことが好きだって気付いたときに零した言葉を聴いたんだ。好きっていうのは、名前で呼ばれてもいいと思ったから。僕を名前で呼んでいるのは、いつも一緒にいる友人だけだからね。それでそこでは何もなかったんだけど…」

一度言葉を切って、十夜は息を吐いた。

甦る、光景。それは今では一つ一つの理由がわかって、由希の気持ちに痛かった。傷つけたのは自分だと理解できるからこそ、十夜は由希に対して憎しみも何も、負の感情は持たなかった。

「放課後、帰りの用意をしていたところに由希が来て…薬品を嗅がされた。…クロロホルムっていうのかな。それで意識がなくなつて、

気付いたら倉庫代わりに使われている空き教室にいた。手首は紐で縛られていて。目の前には由希が立っていて…何て言ったかな…。

『キサラ先輩は渡さない…あなたは僕の』だったかな。それから手を伸ばしてきて、シャツのボタンを二つ外した。…見えたかどうか分からないけど、鎖骨付近に傷があるんだ。由希を助けたときの付いた傷なんだけど。それを確かめた後、『味方ですよ』って言ったから、頷いた。『それなら行かないください』って言われて『それはできない』って返したら、また薬品嗅がされて、気付いたら時間は過ぎてた。それから友人が助けに来てくれて、今ここにいます。十夜は自然と、右手を鎖骨に当てていた。はつきりと示された傷痕。それは小さく、目立たないが、確実に残っていた。

傷痕が残るのは由希の望みなら。それなら甘んじて受けよう。十夜はもう、後悔はしたくはなかった。

「…よくわかったよ。辛いのに言わせてごめん。でも、これで前に進めるよね？」

泉里の言葉は的を射っていて、十夜はふわつと笑った。言葉にすればするほど想いは形になっていって、認識すればするほどこれからどうするべきかが見えてきた。

十夜の笑顔に五月雨と雨水は固まってしまい、泉里は柔らかな笑顔を返した。

整った顔は素直に綺麗と思えるもので。

心を伴う美しさは甘美で麻酔効果があった。

「僕は泉里。この倶楽部の部長で、医者だよ。また遊びにおいで」

「僕は五月雨。よろしくね」

泉里の自己紹介に遅れを取らず、五月雨は言葉を継いだ。本当の名前を名乗ったのは十夜に対しての礼儀だった。

初めから患者ではなかった。それなら、純粹なただの友人から始められる。二人目の、友人。この場にいない雫や水無瀬もきつと十夜を気に入るだろう、と泉里は確信していた。それは予想ではなく、予言だった。

確定している未来は推定未来ではなく。しかし推定からの変化ではあった。

「僕は如月十夜。十夜でいいよ」

繋がり

「済みません…。もう…近付きません」

由希は俯き、消えそうな声で呟いた。自分の行為を責めているのが、はつきりと感じられる、不安定に揺れる声だった。

放課後の教室。断絶された空間のように、周りの音は切り離されていた。三人の息遣いさえ聞こえそうな静寂の中、十夜は椅子に座り、隣には当然のように夏目が机に腰を掛けていた。

そして、十夜の前に立つ由希。

十夜はふう、と大きく溜息を吐いた。そして腕をゆっくり組んだ。由希の視線が腕に集中した。まだ取れない包帯。下に残る痕を見せるのは由希に重い心理負担を強いることになるだろう、と夏目と相談しての結果だった。しかし、包帯も目に痛い。

由希は十夜の溜息に体を震わせ、一步下がろうとした。足が後ろに着く前に、十夜はしっかりと由希の腕を取った。細く、しかしながら筋肉が程好くついた腕。また震えたことが、？んだ手から伝わった。

「由希、言いたいことはそれだけ？ 離れたいの？ 僕から。もう嫌いになった？」

「まさか！ 好きです！ …でも、どんなに好きでも、あんなことをした僕がここにいることなんて」

「できないって君が決めるんだ？」

？ まれた腕を振り解こうともせず、由希は被さった夏目の言葉に口を噤んだ。

由希は、決定権は自分にはないことはよくわかっていた。だからどんな罰でも受けるつもりだった。恩を仇で返した罪は重く、十夜の手から伝わる温もりは、由希にとっての最後の幸せだった。

ただ、夏目の声に非難が含まれていないのが救いだった。

「できるできないは僕の見方だよ。由希、僕は君を」

由希はきつく目を閉じた。最終宣告だった。それは決して良いものではないことは予想できた。それを十夜の口から聞くことになるなんて。由希の体は硬くなるばかりだった。

「責めてはいない。こうなったのは君のせいではないから。気付かなかった僕の、僕と夏目のせいだ。それを君に責任転嫁するのは愚かだからね」

由希が驚愕で目を開けた時、十夜はふつと笑った。明らかに由希が悪いのに、十夜は自分の非をして受け止めていた。

由希は泣きそくに顔を歪め、十夜に抱きついた。？まれた腕をすつと振り解き、両手を十夜の首に回して体重を掛けた。十夜は突然の由希の行動に驚きもせず、小さい子をあやすように背中を撫でた。夏目はそつと十夜に目配せし、良かったね、と口を動かした。

「だけど」

十夜の続く言葉に、由希は身構えた。しかし首に回した腕はしっかりと十夜を捕まえていて、十夜は薄く笑った。

「だけど、僕を名前で呼べるのはまだ先だから。それがこの腕の痕に対する罰だよ」

「…ありがとうございます」

軽すぎる罰を由希は受け入れた。

特別でなくてもよかった。ただ側にいれるだけで由希にとっては幸せだった。十夜は由希の涙が止まるまで、由希の腕を解こうとしなかった。

そのとき、夏目が微かに呟いた。擦れて聞き取り難い言葉が、誰の耳にも入らず消えた。

「泉里…そこにいたんだね」

第3話：空想予告

思い出すのは、あの時のこと。

「十夜、そういえばそろそろテストがあるんじゃないの？」

「あるよ。それが？」

「勉強しなくていいの？　ここに来てる場合じゃないとか」

「僕がヘマすると思う？　勉強は学校でしてるから大丈夫。…由希達に邪魔されないと motto いいんだけど」

雨水は十夜の溜息に同情し、苦笑した。

雨水にとって十夜は患者ではなく、純粹に友人と言える存在だった。同調する感情は不快ではなく、今だからこそ五月雨と冥の關係が理解できるはずだ。

能力を感じさせない、自然と付き合える關係。それを望んでいたことに気付けたのは雨水にとっての一番の幸せだろう。

その二人の会話を雨水の隣で聞いていた。思わず笑みが漏れる。

丁寧紅茶を入れ、二人に勧めた。爽やかな香りが部屋に漂う。

その香りに誘われて、脳裏に微かに昔の思い出が過ぎった。ちょうど二人の様子があの時と重なる。

もつけないのに、と何度思っても消えない感情。

…忘れるつもりもないけど。

「あ、誰か来たみたい」

雨水の声にはっと我に返った。彼のことを考えるといつも無防備になる自分を自覚していた。だからこそ、極力人前では考えないようにならしていた。

沈んでいく思考が行き着く先は、どうしようもないほどに悪い結末で。それはもう既に起こってしまったことだった。

後戻りはできないし、望んでもいない。

もう一度チャイムが鳴ったところで、雨水が玄関の扉を開ける音

が聞こえた。ゆつくりと雨水の後を追いかけた。

「はい、どちらさまで……」

「ここがサイコロジ―倶楽部？」

「そうですけど……何か御用ですか？」

「んー患者じゃないんだけだね」

雨水は不思議と警戒心を持っていなかった。本能で感じる質が目の前にいる人物に危険信号を発していなかった。

そんな雨水の反応が不思議だった。

「どうしたの？」

雨水の横に立った。

夕日に輝く髪ははつきりとわかる黒い色。逆光にも関わらず、強い光を持つ深い茶色の瞳。容姿はかっこいいと称してもよいであろうと思えるモノだった。全体の雰囲気安定している。

「どちらさまでしょうか？」

「泉里？ 泉里だよ。久しぶり、会いに来たよ」

伸ばされる手は見たことがない手で、目の前に立つ人物は見たこともない人物で、しかし感じる気配は知っているモノだった。

『泉里』と呼ぶのは部員と世界の関係者と限られた友人くらいで。

『泉里』という名前を知っているのは、あと一人。

「夏目……？」

「当たり前。この格好でわかるなんてさすがだね」

「夏目？」

聞き覚えのある声に、十夜は部屋から顔を出した。十夜から『親友の夏目』のことは聞いていた。十夜を名前で呼べる人物の一人だ。まさか、あの『夏目』だったとは。

「十夜。もしかしたらとは思っていたけど。まあ詳しいことは後から話したほうがいいかな」

ね？と笑いかける夏目に、差し出された手を引いた。夏目は自然と腕の中に納まる。

その一瞬の出来事に、雨水は首を傾げ、十夜は苦笑した。

十夜から瞬時に伝わる記憶。十夜には夏目の考えがわかっていた。十夜が由希と対峙したとき、夏目の呟いた言葉はしっかりと十夜の耳に入っていた。

夏目は確かに『泉里』を知っていた。

「夏目……！」

「泉里、僕はここにいます。嘘じゃないよ」

強く抱きしめると、夏目は僕の背に腕を回し、軽く力を込めた。確実に伝わる想い。望んで止まなかった、ただ一つの奇跡。

十夜は呆れたように笑った。僕の様子がいつもと違うのが新鮮なのだろう。

「夏目、君は僕の親友である前に、どんな人物だったのさ」

「あはは。一度死んだ、ってところ。そのままの意味でね。前の名前は真弓夏目。まあその辺のことは後で詳しく話すから……だから泉里、ゆっくり話そう？」

よしよし、と背を擦る夏目にこくん、と頷いた。素直になれた。

無防備は、危険がなければ必要不可欠なものだった。

夏目の前で、意地を張っても意味などない。

中学生の頃

「僕が話した方がいいかな。その方が泉里も辛くはないだろうし、僕がいる実感が湧くしね。じゃあ、僕が真弓夏目だった時の話からね」

アッサムの香りが漂う中、夏目は物語を聴かせるように語った。それは辛い過去。しかし良い過去でもあった。終わりがこなければハッピーエンドの未来が約束された、過去。

夏目の隣に座り、手を繋いでいた。一度離れた手が、今ここに存在することを感じていたかった。そして夏目はそれを当然のように受け入れていた。

「中学校に入学して、すぐの頃だった」

*

「生か死か、それが問題だ！どちらが気高いだろう」

「ハムレット？ 君、新入生だよな？」

思わず声を掛けていた。学校の近くにある公園のベンチ。一人の少年が座って黒く染まっていく空を眺めていた。淡い稲穂色の髪が色を失っていく。

それが綺麗だと目を引いて。ポツリと呟いた言葉はとてもよく似合っていて。

だからこそ、近くで見たいと思った。声を掛けるつもりにならなかったのに。

「自殺願望があるわけじゃないね。生か死か。気高いのは生だよ。どんな事情があっても死は逃げだから。尊く、何ものにも代えることのできないものだからこそ、自分の生を許さないと」

思いの外、声は通った。遮る音がないせいだろう。少年は驚きの表情を浮かべた後、微笑んだ。くせっ毛の髪が軽く風になびく。

幼児たちの姿は既になく、閑静な住宅街が姿を現し始めていた。今日は入学式ということもあり、生徒はほとんど学校には残っていない。通学路である公園の近くの道を通る者はいなかった。

「君も新入生だね」

少年は新しい制服を見、判断した。まだ着こなせてはいない制服。それだけで新入生と判断することは容易かった。だからこそ、初めから少年を新入生だと判断できた。

「僕は真弓夏目。皆には真弓って呼ばせてるけど…夏目でいいよ。なんかその方が君には合うから」

周りの人は名字が名前みたいで面白い、という理由から名字で呼びたがる。それが原因で、名前を特別なものだと思うようになった。今まで、名前で呼ぶのを許したことはない。名前で呼ばれても返事をしなかった。

しかし、少年には名前で呼ばれたかった。少年には夏目、と呼ぶのが合っているように思えた。真弓、の発音では違和感がある。これは主観だけど、自分の名前だからこそ、名前に拘りがあるからこそ綺麗に呼んでほしかった。

「…僕は紗雲泉^{さくもいずみ}。これは通称。本当の名前は泉里^{いずみ}っていうんだけど、絶対に呼ばせない名前なんだよ。その理由は言えないけどね、君には泉里^{いずみ}って呼んでほしい」

「なんで？」

「特別だから。見つけてくれたから。わかってくれたから。それが理由じゃ、足りない？」

「まさか。よろしく、泉里」

握手を求めたのはどちらが先だったのか。月の光が降り注ぐ中、泉里は嬉しそうに笑っていた。

*

「泉…何かな、これは」

「似合ってるよ、真弓」

頭から垂れ下がるリボンを引き、溜息を吐いた。泉里は片方のリボンを指で弄っている。くるくると回転する蒼いリボン。

「紗雲！ よくやった。これで真弓がクラス代表に決定だな」

ある一人の発言に、クラスメート達は賛同した。

もう諦めていた。足掻いたところで決定事項は変えられない。一番楽な役でもあるのだから、メリットはある。デメリットの方は考えなくなかった。

「紗雲、お前のクラスの代表は？ 俺のクラスに協力していいのか？」

「僕のクラスの代表は僕だよ。負けないからね？」

「紗雲が代表かー。いい勝負になりそうだ」

泉里は意地の悪い笑みを浮かべ、リボンを軽く引いた。簡単に解けていくリボンが弧を描く。

学校でのクラスは違っていたが、互いによく教室を行き来していた。クラスが違うことは何の障害にもならない。そして今のうちに、泉里は僕のクラスに馴染んでいた。クラスメイトがいる前では『泉』『真弓』と呼び合う。どちらも、名前の印象を弱くしたかったからだ。

圧倒的に泉里のクラスが早く終わるのが多いことより、僕を迎えに来るのが日課だった。放課後のホームルームの時間でも、担任とクラスメートは泉里の出入りを咎めようとはしなかった。それだけ影響していたのは人望だけが関係していたわけではない。そのときから泉里は特別な何かを持っていた。

そんな放課後、泉里は教室に入ってきて、文化祭のイベントの一つである『クラス対抗男装・女装コンテスト』の代表者選任に参加していた。『クラス対抗』ということもあり、連帯責任のイベントだ。最下位のクラスは学校中をクラス全員で大掃除するというバツゲームがあり、メインイベントといっても過言ではなかった。

男装の方は学年の中で綺麗と評判の少女に決定したが、女装の方

はなかなか決まらなかった。泉里は何を思ったのか、胸のポケットからリボンを取り出し、油断していた僕の頭にリボンを巻きつけていった。

軽く纏められた髪。蒼が映えていて「すごく似合っている」という泉里にクラスメートは頷いた。

そして僕は晴れてクラス代表に決定した。

誰もこのとき、訪れるであろう未来が幸せではないとは知らなかった。信じて疑わない、続くと思っていた日々。

中学二年のあのときまでは。

終わりと始まり

「素顔のままでいるか、笑顔を強制するか。人間関係に摩擦はつきもののなに」

「それでも厄介事は避けたいという本音があるよね」

現代文の教科書に載っている小説の内容について、語り合いながら下校していた。通学路は途中まで一緒に、分かれ道までは話をしながら帰るのが日課だった。二キロの距離を歩くのが苦にならない時間を二人で過ごす。

通学路は交差点が多く、四方は壁に囲まれていた。少し眩暈と錯覚が起こりそうな道が続く。

泉里が先に角を曲がろうとしたその時、車の走ってくる音が聞こえた。重いエンジン音。アクセルを思いきり踏んでいるのがわかる。身体は自然と泉里より先に角を曲がっていた。

目の前に映るのは幼児。走ってくる車に気付かず、道路に小石を並べて遊んでいた。車のスピードは弱まったが、それでも制限速度を軽く超えていた。

「危ない！」

幼児の腕を？み壁に寄せたが、反動で身体は道の方へと向かっていった。

迫る車。避けることは不可能だと感じた瞬間、身体は宙を舞っていた。自然と受身を取ったが、腹部に衝撃が残っていた。痛覚はなく、夢のように感じた。流れる血液が視界の端に映る。それはじわじわと地面を濡らしていった。血の占める面積が広がる。

「夏目！」

泉里の声が近くで聞こえた。目を開けると至近距離での泉里の顔。泉里の瞳には涙が浮かんでおり、零れ落ちそうだった。

「泉里…泣かないで」

「夏目…」

「僕、のことは…いいから、あの子を、助けて…あげて。壁で、身体を打った、かもしれない。僕が…護った命、を助けてあげて。…気管が、潰れなくて、よかった。こうやって、最後まで話せる…」

泉里はすぐに幼児に近寄り、身体を触って確かめていた。大声で泣き叫ぶ幼児が心配だった。強く腕を引きすぎたかもしれない。どこか怪我をしているかもしれない。

泉里は一通り診た後、戻ってきた。何かを確かめるように、そつと頭に手を置いた。

頭に添えられた手が優しく、思わず笑みが零れた。

「あの子は大丈夫。君が護ったんだよ、夏目」

「良かった…。痛覚…が、麻痺してる分、今は楽。こう、やって…死んで、いけるのって、幸せ、なのかな。泉里、がいてくれて…良かった」

泉里の頬に一筋の涙が流れた。しかし、それ以上は流れなかった。泣かないで、と言った言葉を覚えているのだろう。

誰かが悲しむ姿を見るのは嫌だった。それが大切な人なら余計にでも護りたいと思った自分の心に嘘はなく、選択は間違っていたとは思わない。

これが運命なら喜んで受け入れよう。

「泉里、ありがとう。君の人生が君にとって優しいものであるように」

意識はそこでなくなった。

「僕の代わりになってくれるの？　ありがとう」

黒髪の少年は嬉しそうに笑った。初めて見る顔だった。

「さて、僕は初めからスタートか。望んだことだからいいけどね。じゃあ、あとはよろしく」

笑顔のまま背を向け、少年は走って行った。かける言葉が見付かず、体も動かない。

数メートル先で、少年は消えた。

「転生だよ」

すぐ後ろから聞こえた声に、反射的に振り向いた。

何もない空間に現れた少年。今までいなかったことは空気でわかる。とても洗練された雰囲気を感じた。

「彼は次はまた初めから。同じ身体での転生を選ばなかったんだよ。まあこの身体は君の次の転生に使われるからそれは必然的選択だけだ」

「転生……」

「そう、生まれ変わり。君はまた十四歳から始まる。また大切な人に出逢うために。大切な人の支えになるために。ただ、名字と容姿が変わるからリスクは大きい。君の名前は悠里夏目^{ゆうり なつめ}。あの少年の苗字を受け継いでね。名前はそのまま。戸籍、その他の身近な情報は変えてあるから。これからどうするかは君次第だ」

少年は指を鳴らした。

何もなかった空間は、見慣れない部屋へと変わっていた。

転生

「それから悠里夏目になって、十夜と出逢ったんだよ」

長い物語は幕を下ろした。十夜との出逢いからはまたの機会に、と夏目は片目を瞑った。

雨水は思わず聞き入ってしまったって、身体が夏目の方へと乗り出していた。慌ててきちんと姿勢を正す雨水に夏目は笑みを返した。「時間的にいうと、夏目は泉里に逢って、生まれ変わってから僕に逢った。泉里は転生を知らずにアメリカで医師免許を取っていて、歩とそこで出逢った。帰ってきてから五月雨たちに逢った。順番はこうだって言ってたよね？ それから、高校三年の年になって、全員が出逢った。なんか、これが運命というものかな」

十夜の要約に、夏目と同時に頷いた。

間違いのないまとめだった。それは一つの道を示しているようで、運命なんて陳腐な言葉で表せない繋がりに思えて。しかしそれを表す言葉はそれしかなく。

これは神のシナリオなのかもしれない。

「思い出すのはいつも出逢いのことだよ。皆との出逢いは忘れない。それが自分にとって生きる意味に繋がるから」

夏目と繋いでいる手に力を込めた。今度は確かにある温もり。もう忘れたくない。

雨水はその光景を微笑ましく見ていた。見られている方としては恥ずかしいものがある。

そんな雨水から伝わるのは、夏目は十夜に似ていると思っている気持ちだった。確かに印象は似ているかもしれない。

十夜はそんな雨水を知ってか、夏目の空いている方の手を引き寄せた。

「十夜…嫉妬？ 違うよねー。僕は悠里夏目だよ。それ以外の何もでもない」

「わかつてるならいい。今更、真弓夏目になられたところでどうすることもできないから。後悔はしていないよね、二人とも」

先程と同じように、夏目と同時に頷いた。

悔やんだことはある。しかしそれだけではなく、後悔に縛られたりはしなかった。ちゃんと割り切っていた。今まで後には引きずっていない。それが二人の約束だった。

夏目は柔らかく、繋いでいた手を外し、十夜の首へと掛けた。顔は肩に置き、凭れ掛かる。

「転生して、最初に逢えたのが君で良かった。だから泉里も見付けられた。君のその高潔な性質が救ったものは大きいよ。皆に影響してる」

「そうだね。僕も十夜に救われた。君が雨水を救ってくれたから、僕も楽になったんだよ。夏目を繋げたのも君だね。本当に、『名は体を表す』かな」

最後の言葉の意味を知る者はいなかった。この場に歩がいたら、きつと微笑んでいたであろう言葉。

意味はわからなくてもいい。自分がここにいる限り、十夜はあの人に出逢うであろうと予想していた。そして、あの人もそれを喜ぶことも。まだ、出逢いの連鎖は続いている。それは運命めいたもので、それを運命とは呼ばない。

言葉で表す必要なんて、見出すことはできないモノがそこにはあった。

番外編：奇跡（前書き）

智哉は『紅に沈んだ言葉』に出てきます。
出会いは由宇繋がりで。

番外編：奇跡

奇跡は起こるんじゃないやなくて見つけるのだと。そう言ったのは、泉里だった。

「奇跡って由宇のこと？」

「彼も含むけど、彼だけじゃない」

泉里の答えに首を傾げ、ちらりと智哉を見た。智哉は相変わらずの無表情で緑茶を飲んでいる。

無表情だけど興味はあるようで、関心を示しているのがなんとなくわかる。

まだ、智哉の心はわからない。まあ、読もうとは思わないけど。

「そもそも、何で由宇は『奇跡』って言われてるの？」

ずっとわからなかった疑問に、智哉は同意するように泉里を見た。智哉も知らないらしい。

泉里は苦笑した。

「由宇はね、根本的に公平なんだよ。好き嫌いは後発的なもので」
「なるほどね」

智哉は頷いた。智哉は、由宇のその性質を知っていた。そこに惹かれた要素がある、と以前言っていた。今まで『美形』という特別扱いを受けていたから、公平な由宇は特別扱いしなかった。確かに、僕も特別扱いされなかった。

でも、それだけではまだ納得できない。

「公平ってあり得ないんだよ。人は優劣をつけたがるから。比較して、自分を知るんだ。だから、公平な由宇は『奇跡』的な存在ってこと」

泉里の補足説明に、俯いた。

確かに人間は有利なのを好む。心が病むのは、それが原因になることが多い。

それを痛いほど知っているから、今更ながらに由宇の本質が理解できた。由宇は他人と比較なんてしないで、自分を有利だとは思わないんだ。だからこそ、努力し続けていられるのかもしれない。

そんな由宇に、無意識に惹かれてはいたけど。

「奇跡は起こるんじゃない、起こされるんだ。そして、それは見つけられて意味を持つ」

智哉の声は優しくかった。由宇に出逢ったことを言っているんだろ
う。

由宇に出逢えて、由宇を見つけて、智哉は奇跡だと思ったのかも
しれない。

泉里は微笑して、智哉を見ていた。

「九死に一生、とかも、人の力だよ。自然の力に見えても、その時
そのタイミングで起こすのは人なんだ。由宇は、それを起こす人だ
から『奇跡』と言える」

「由宇はタイミングが合うんだね」

やっと納得できた。出会うのだってタイミングは大切だった。

僕は五月雨と喧嘩したときに由宇に会ったから、由宇は何でも話
せる友達になっていた。冥のように患者から始まらない関係は新鮮
で、頼っているところがある。

それが由宇が僕に起こした『奇跡』だった。それを今、見つけた。
「つまりはただの分類だね。人によって起こされてはいるんだか
ら。それを見つけて認識するかどうか、なだけで」

智哉はつまらなさそうに茶菓子を摘んだ。泉里は智哉の意見が合
つてる、とでも言うように頷き、口を開いた。

「智哉にとっては面白くないだろうね。『みんな』の由宇になるか
ら」

泉里の嫌味な笑みに、智哉は苦笑を返した。それを隠すかのよう
にカップに口を付けた。

「十夜がいなかったら、由宇が一番好きになってたかも」

思わず出た呟きに、智哉は噎せた。緑茶が気管に入りそうになっ

たようで、涙が出ている。

呼吸を落ち着かせようとする智哉に、泉里は背中をさすりながら困ったように笑った。

「由宇は雨水が気に入っているからね。だから、さっきの発言は智哉を動揺させるのに十分だったわけだ」

涙目の智哉をじっと見た。

由宇が僕を気に入っていても、由宇が選んだのは智哉だ。僕が由宇を一番好きになっても、由宇の一番は智哉なのに。

智哉の乱れた呼吸が可笑しかった。

「だから、それが奇跡なんだよね？　僕が十夜の後に由宇と出逢ったのも」

「そうだね。由宇は確かに智哉を選んでいるんだよ。どのタイミングだろうと」

他の誰に好かれようと関係ない。由宇は智哉を選んだ。それにタイミングは関係ないと、泉里は言う。

なら、二人の出会いには奇跡ではなく。定められているものは。運命という言葉が一番合っているのだろう。

智哉はふっと口元を緩めた。

「君たちにそう言われると、本当に運命だっと思えるね」

僕の言葉で良ければ、何度だって言ってあげる。

『奇跡』と呼ばれる由宇が選んだ特別。僕にとっての特別な友達になるような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0563d/>

サイコロジ－倶楽部

2011年3月24日22時57分発行